

〔研究論文〕

北インドにおけるイスラーム諸王朝とその建築物 —デリー・スルターン朝末期とムガル帝国初期を中心に—

宮原 辰夫

〔Article〕

Islamic Dynasties and Its Architecture in North India

Tatsuo MIYAHARA

Abstract

This paper will examine the narrativeness of Islamic dynasties (Saiyid, Lōdī, Mughal and Sūr) in North India and its architecture using various books, such as “Histy of the Rise of the Mahomedan Power in India” by Ferishta (Persian chronicler, 1560-1620), “Bābur-nāma” of Babur. In other words, it will examine the power and culture of Islamic dynasties in north India, and it will also investigate the succession of Islamic cultue and its blending with the Hindu / Indian cultue.

はじめに

デリー市内には八角形のイスラーム墓建築が多数存在している。とりわけ、デリー・スルターン朝(デリー諸王朝; 1206-1526)の中でも、サイイド朝(1414-51)とローディー朝(1451-1526)の時代に集中している。しかし、最初に八角形のイスラーム墓建築がデリーに登場するのは、ハーネ・ジャハーン・テランガーニー(Khan-i-Jahan Telangani, d.1368)の墓からである。テランガーニーは、トゥグルク朝(1320-1413)の第2代スルターンのムハンマド・シャー(在位1325-51)の治世から仕えていた、南インドのテランガーナー地方出身のヒンドゥーからの改宗ムスリムであった。⁽¹⁾第3代スルターンのフィーローズ・シャー(在位1351-88)の治世にはワズィール(宰相)となった人物である。これまで四角形の墓建築がスルターンの主流であったが、この時代から八角形の墓建築が主流となったのはなぜなのであろうか。

ギヤースッディーン・トゥグルクはムルターンの総督であったときに、生前に美しい八角形の墓(1320)を建立した。デリーのハルジー朝(1290-1320)を攻略したのち、ギヤースッディーン・トゥグルクはこの墓を大変深く崇拝していたムルターンのスフラワルディー派スーフィー聖者、シェイク・ルクヌッディーン(Sheikh Ruknuddin)に贈呈した。⁽²⁾ トゥグルク朝(1320-1413)を創建したギヤースッディーン・トゥグルクは、トゥグルカーバードの要塞の近くに記念碑的な四角い墓を建設している。なぜ彼はムルターンで建設したような八角形の墓をデリーに建設しなかったのであろうか。おそらく彼は先代のスルターン(奴隸王朝のイルトゥトミシュやハルジー朝のアラーウッディーン)が四角い墓に埋葬されているのを知り、自らもスルターンとして彼らと同様の伝統的な四角い墓様式を選んだという可能性は十分考えられる。⁽³⁾



図1 ハーネ・ジャハーン・テランガーニーの墓
(ニザーム・ディーン)

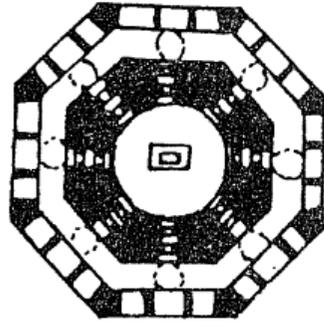


図2 テランガーニーの墓 平面部
R.Nath, History of Sultanate Architecture(P.85)



図3 ギヤースッディーンの墓



図4 フィーローズ・シャーの墓

最初の問いに戻ると、デリーではスルターンの伝統的な墓様式であった四角い墓建築がなぜ八角形の墓様式に変わったのであろうか。推測にすぎないが、デリーで最初に八角形の墓建築を建てたのはスルターンではなく、ワズィール(宰相)であったことを考えると納得がいく。その後、ティムールの侵略によってトゥグルク朝が崩壊すると、ヒズル・ハーンはデリーにサイイド朝を樹立したが、君主権が弱く、デリー周辺の一王朝に過ぎなかった。サイイド朝後のローディー朝もアフガン系貴族の連合政権的性格を帯びており、君主はあくまでも貴族連合体の代表的存在で、君主権は強いとは言えなかった。

サイイド朝、ローディー朝と続く、デリー・スルターン朝は、いずれも君主権が弱かったために、堂々とした四角い様式の墓建築を建てるのは憚れ、トゥグルク朝のワズィール(宰相)同様の八角形様式の墓建築を建てることで満足するしかなかったのではないかと。とりわけ、ローディー朝時代になると、アフガン系貴族や族長は独立心が強く、自らの墓がまさに権力の象徴でもあるかのように至る所に八角形の墓建築だけでなく、四角形の墓建築も多数残っている。ムガル帝国になると、墓建築だけでなくモスクもデリー・スルターン朝とはかなり様式が異なっていく。

本論文は、ペルシア人編年史家フィリシュタ(Ferishta,1560-1620)の『インドにおけるイスラーム政権勃興史』やバーブルの『バーブル回想録(バーブル・ナーマ Babur-nama)』などを手掛かりに、デ

リー・スルターン朝末期(サイイド朝とローディー朝)からムガル帝国初期皇帝(バーブル帝とフマーユーン帝)、そしてスール朝までのイスラーム諸王朝の物語とその建築物との関連性を明らかにすることである。言い換えれば、北インドのイスラーム諸王朝の権力と文化を解き明かすと同時に、イスラーム文化の継承とヒンドゥー文化との混淆を考察することでもある。

1. サイイド朝(1414-51年)

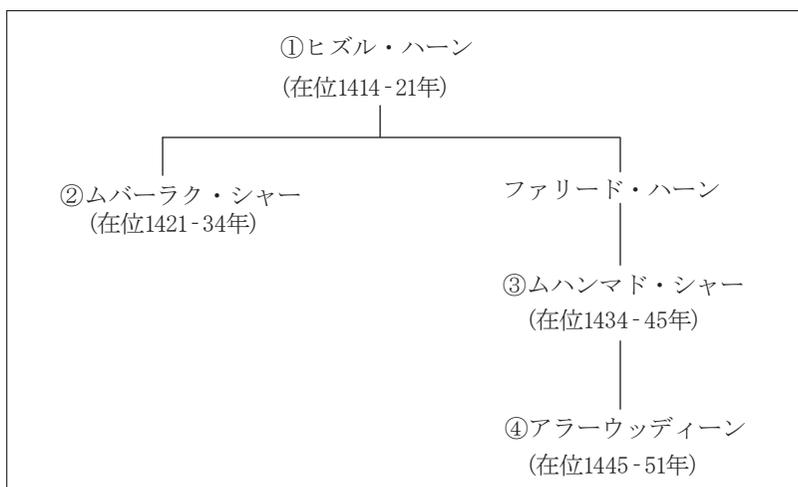


図5 サイイド朝の系図

(1)ヒズル・ハーン(在位1414-21年)

1388年、トゥグルク朝のスルターン・フィーローズ・シャーが病死すると、宮廷内で権力をめぐって内紛が起こった。宮廷貴族たちがその権力闘争に明け暮れている間に、地方の穆斯林やヒンドゥーの指導者たちはトゥグルク朝からの独立を目指していた。こうしたインド(トゥグルク朝)の宮廷の内紛や地方の独立という、インドの衰退と混乱を耳にしたティムール(1336-1405)は、直ちにサマルカンドからインド遠征に乗り出した。

1398年、ティムールは騎兵を主力とする大軍を自ら率いてインダス川を渡った。不思議なことに、デリーに向かって進軍する途中、インド側からの抵抗を受けることはほとんどなかった。そのため、デリーに辿り着く間に捕えたインド人の捕虜は10万人を越えたという。捕虜のほとんどが偶像崇拝者であったため、15歳以上の捕虜はすべて殺すように命令され、その日のうちに10万人近い捕虜がためらうことなく殺されたという。⁽⁴⁾

ティムールはとくに抵抗も受けず、デリーの北東にあるドアーブからヤムナー川を渡り、フィーローザバードの平地に陣を張った。一方、スルターン・マフムード・トゥグルク(在位1394-1413)と宰相マッラー・イクバル・ハーンは、デリーの騎兵隊と装甲した120頭の象部隊とともに、ティムールと戦うために前進した。この戦場がどこであったかは定かでないが、荒松雄は、「スルターン・マフムードは旧ラーイー・ピタウラーの城塞を、また宰相マッラー・イクバルは旧スィーリーの城塞を拠点としていたといわれている」⁽⁵⁾ という記述から考えると、図6のフィーローザバードと旧スィーリー城砦との間か、よりフィーローザバード寄りであった可能性は高い。

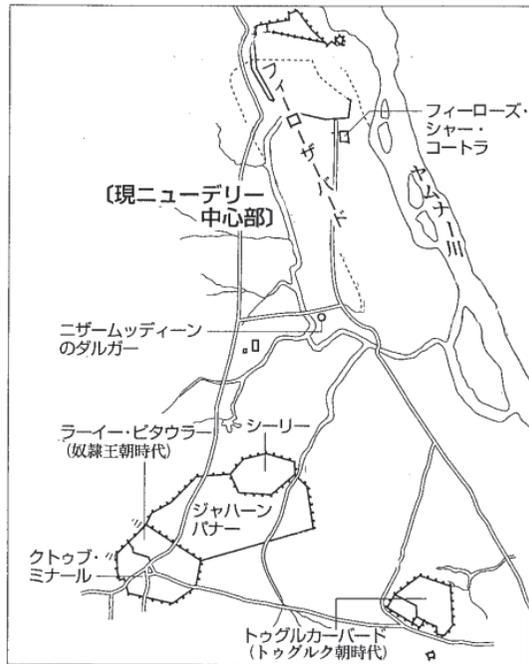


図6 トゥグルク朝時代のデリー

この戦いは、最初の突撃で象が暴れ出し、乗っていた兵士は振り落され、隊列は大混乱し、デリー軍はあっという間に崩れてしまった。デリーを守るという勇敢な戦いもしないまま、ほんの一瞬で自壊してしまったのである。ティムール軍はデリーの城門に逃げ帰ろうとするデリー兵を追い、その多くが殺され、城内は大混乱に陥った。その混乱に紛れて、スルターン・マフムード・トゥグルクと宰相は夜のうちに首都デリーを見捨てて、スルターンはグジャラートへ、宰相はピラムの方角へ逃げた。

ティムールは、彼の陣地にやってきたデリーの長のすべての服従を受入れ、軍税を支払うことを条件に保護することを約束した。次の金曜日、あらゆるモスクで金曜礼拝の説教(フトバ)の際に、皇帝であるティムール(統治者)の名前を唱えさせた。デリーに再び平穏な日が訪れるかに見えたが、貴族や豊かな商人の中に課せられた軍税を拒否する者が現れると、ティムールは自分の権威を強めるために、軍隊を町に出動させた。これが最も壊滅的な結果を生み出す一歩となった。ティムール軍の兵士はデリー市民の富を奪い、女や子供も殺し、家々に火を放した。通りは死体で溢れ、通ることさえできなかった。その時奪われた戦利品の中には、大量の金・銀、ルビーやダイヤモンドなどの貴重な宝石が含まれていたと言われる。⁽⁶⁾

デリーに入城したティムールは、120頭の象、12頭のサイ、フィーローズ・トゥグルクが集めた多くの珍獣を自ら捕獲した。またティムールは、フィーローズ・トゥグルクが建てた素晴らしいモスク(現在のフィーローズ・シャー・コートラ(図7))に余りにも魅せられてしまったので、それと同じモスクをサマルカンドに建てたいと考え、そのモスクの設計者とレンガ職人や技術者をデリーからサマルカンドに連れて帰ったと言われる。それが後にサマルカンドに建造された金曜モスク「ビービー・ハーヌム・モスク」である。⁽⁷⁾



図7 フィーローズ・シャー・コートラ

ティムールがサマルカンドに帰還すると、デリーの町は無政府状態に陥り、食糧難、飢饉、疫病の発生によって人口が激減したと言われる。ティムールがインドに侵入する前に、すでにジャウンプル(1394年)やグジャラート(1396年)の長官がトゥグルク朝から独立し、ムスリム地方政権が樹立していた。こうして、トゥグルク朝の弱体化は進んでいたが、ティムールの侵攻により、またマールワー(1401年)の独立により、トゥグルク朝はほとんど解体状態となった。ティムールは帰還の途中、ジュモールでティムールの武将となっていたヒズル・ハーンをマルチーンとラーホール、デパルプールの長官に任命すると、翌1399年にサマルカンドに帰還した。

ヒズル・ハーンの系譜を簡単に触れると、ヒズル・ハーンの父、ムルク・スレイマンは立派な人物で、フィーローズ・シャー・トゥグルクの治世下において、有能な貴族でマルチーンの軍司令官を務めていたムルク・マルダン・ダウラートの養子であった。ムルク・マルダン・ダウラートが亡くなると、その地位は実子のムルク・シャイフが継承した。そして彼が死ぬと、預言者ムハンマドの直系子孫、サイイドと称したムルク・スレイマンがマルチーンの長官に任命された。その官職は彼の息子ヒズル・ハーンへと継承された。⁽⁸⁾

ヒズル・ハーンは1414年にデリーを占領し、スルターン国を樹立した。ヒズル・ハーンの建てた王朝は、ヒズル・ハーンがムハンマドの直系子孫の一族であったので、サイイド朝と呼ばれるようになった。しかし、ヒズル・ハーンは決して自らをスルターン(王)とは称さなかった。ヒズル・ハーンが自らをスルターンと称さなかったのは、サイイド朝はあくまでもティムールの傀儡政権であり、自らも代理人に過ぎないことを自覚していたからであった。ヒズル・ハーンの支配に対する姿勢について、フィリシュタは次のように記述している。

「彼(ヒズル・ハーン)は贈り物を自分の部下の仕官に分配する一方で、王の称号(スルターン)を名乗るのを差し控え、自分はティムールのために政権を守るのだと公言していた。ティムールの名の下に硬貨を鑄造させたり、フトバ(金曜礼拝の説教)の際にティムール(統治者)の名前を唱えさせたりした。ティムールが死ぬと、彼の後継者シャー・ルフ・ミールザーの名をフトバで唱えさせ、ティムール朝の首都サマルカンドへ貢ぎ物を送った。」⁽⁹⁾

またヒズル・ハーンは、預言者ムハンマド自身に備わった性格、つまり慈悲、勇敢、寛容、憐れみ、親切、誠実、高潔といったものを持っていたと言われる。それはデリーでの支配はわずか7年

ほどであったが、彼の行った善政についてフィリシュタは次のような記述を残している。

「彼(ヒズル・ハーン)がデリーを支配していた時代、公平で、寛容で、慈悲深い君主であった。そのために、彼が亡くなると臣民は大いに嘆き悲しんだ。そして彼の記憶をとどめ、彼への尊敬の印として、満場一致でデリー住民は3日間、黒服を着て喪に服した。」⁽¹⁰⁾

スルターンとしてのヒズル・ハーンの墓廟がデリーにないのは、サイイド朝はあくまでもティムールの傀儡政権であり、自らも代理人に過ぎないことを自覚し、その姿勢を貫き通したからではないかと思う。ヒズル・ハーンの後を継いだ三人のスルターンは、初期にはティムールの支配を受けながら、後にはアフガン系諸部族の首長の支持を得ながら、弱小政権として何とか支配を維持したのであった。

(2) ムバーラク・シャー(在位 1421-34年)

ヒズル・ハーンは体調を崩し、あらゆる回復の望みが絶たれると、長子を自分の後継者に任命した。1421年にヒズル・ハーンが亡くなると、その3日後にムバーラク・シャーは王位に就いた。ムバーラクの治世は安定したものではなかった。ムバーラクは、13年あまりスルターンの地位にあったが、つねにパンジャープのヒンドゥー諸種族の威嚇や、ジャウンプルのスルターンやメーワト、エタワー、グワーリヤルの君主たちへの対応に費やされていた。

ムバーラクに人物について、フィリシュタは、「彼(ムバーラク)は優れた才能の持ち主であった。どんな場合でも、公平であり慈悲深い人間であった。彼の性格は極めて平等であったので、彼は生涯においていかなる人に対しても怒りに任せて語ることは決してなかった」という評価をしている。⁽¹¹⁾

確かに、ムバーラクは支配地における軍司令官に対してはつねに信賞必罰で臨んでおり、それに従って軍司令官職や他の官職を入れ替えたり奪ったりして統治を行っていた。しかし、信賞必罰が妥当なものであるかどうかは状況や当人の捉え方によって異なる。ムバーラクも人間ある以上、ある軍司令官に権力が集まることを警戒することもあるろうし、特定の軍司令官を愛顧する場合もあるろう。名誉を重んじる貴族にとって、信賞必罰は扱いを一步間違えると恨みや妬みを買ったり、知らないうちに屈辱を与えたりすることになりかねない。

こうしたムバーラクの扱いに不満を抱いていた宰相のサルワル・ムルク(Sarwar-I Mulk)はヒンドゥーの一派と共謀してスルターンを暗殺する機会を狙っていた。この暗殺の顛末について、フィリシュタは次のように記述している。

「1435年の1月、ムバーラクは習慣に倣って、新しい町に最近建てられたモスクに少数の同伴を連れて礼拝に出掛けた。同時に、暗殺を企てた大臣らの一部もヒンドゥーの一派を引き連れてモスクに入った。その残りの者は出入口には邪魔が入らないように見張りに立った。ムバーラクは陰謀を企んでいる者が甲冑を着ているのに気づいていたが、しばらく彼らに注意を全く払っていなかった。ついに、ヒンドゥーの一人が刀を抜いてムバーラクを目がけて突進すると、他の者もその後が続いて突進していった。そしてこの重要で優れた人物であったスルターンは殺された」⁽¹²⁾

ここで記述されている「新しい町」について、フィリシュタは、「スルターンは新都をジャムナー

河畔に建設するよう命じ、それをムバーラカーバードと呼んだ」と記している。おそらく「新しい町」とは、ムバーラクが建設した新都「ムバーラカーバード」に違いない。またヤヒヤー・ビン・アフマドの「タリーキー・ムバーラク・シャー(『ムバーラク・シャーの歴史』)」にも、1434年1月19日、スルターンは数人のお伴とともにムバーラカーバードに到着し、そこで礼拝中に殺されたと書かれている。⁽¹³⁾しかし荒松雄は、ムバーラクの墓建築が残存している地をかつての「ムバーラカーバード」と結論づけることに疑いを持っており、たとえ造営の意図があったとしても、いわば計画倒れに終わったのではないかと推察している。⁽¹⁴⁾

今日もなお、「ムバーラク・シャー・コトラ」という地図上に記された地名に、スルターン・ムバーラク・シャー・サイドの墓とされる八角形の墓建築が残存している。図8のように、墓建築の全容を写真に収めることは難しいほど、周りには住宅が密集している。



図8 ムバーラク・シャー・サイドのものとされる墓

(3) ムハンマド・シャー(在位1434-45年)

ムバーラクが亡くなると、宰相のサルワル・ムルクはムバーラクの養子で、初代スルターン・ヒズル・ハーンの孫であったムハンマド・ビン・ファリドを王位に就かせた。暗殺の首謀者であった宰相のサルワル・ムルクは、「ハーネ・ジャハーン」(Khan-e Jahan)の称号を得ただけでなく、王の財宝(宝物)、王位の象徴となる王冠、王笏(しゃく)、宝珠など、ほかの所持品(個人資産)を管理する立場にあった。彼は古参の大臣からすべての官職を奪い、それを自分に都合のよい人物に与えた。野営地にいた副宰相カーリー・ハーン(Kaly Khan)と他の長官たちは、スルターンの死を聞いて、直ちに会議を招集した。彼らは内乱に陥ることを恐れて、結局宰相サルワル・ムルクの新しい体制に従うことを決定した。そして暗殺の陰謀を企てた連中(宰相とその一味)に復讐する好機を待つことにした。⁽¹⁵⁾

宰相サルワル・ムルクは早速人事に着手し、ヒンドゥーの共謀者たちを高官に登用した。彼らにドアーブ地域の支配を任せたり称号を与えたり、さらにはかなりのジャギール(施与地)が与えられた。その一方で、前スルターンの廷臣たちは迫害され、ジャギールは奪われ、追放され、なかには偽りの口実により命を失った者もいた。これに対して、前スルターンに仕えていた貴族たちは宰相サルワルの現体制に公然と反旗を翻し行動に打って出た。この反乱を鎮圧する軍司令官として送られたのが副宰相のカーリー・ハーン(カマル・ムルク Kamalu-l Mulk)であった。彼は以前から暗殺を企てた連中(宰相の一味)に復讐する機会を狙っていたので、この反乱を起こした不満分子と

もにデリーに行軍した。⁽¹⁶⁾

スルターン自身も、宰相サルワルに従わなければ、国の運営が困難に陥ることは分かっていたが、何とかこの機会を利用して、宰相を追放することができないかと考えていた。スルターンの計画を知った宰相は、先手を打とうとして、スルターン・ムハンマドの暗殺を決行した。その顛末について、フィリシュタは次のように記述している。

「1436年7月23日、以前スルターン・ムバーラクの暗殺に手を貸したミーラーン・サドルの息子たちとその従者の数人の手を借りて、宰相(サルワル・ムルク)はスルターンを殺すために、刀を抜いてスルターンのいる宮殿に押し入った。しかしスルターンはすでにその企みを察知していたので、暗殺を未然に防ぐために護衛兵を見張りに立てていた。護衛兵たちは彼らが侵入すると、一斉の合図で暗殺者を目がけて飛び出した。暗殺者たちは逃亡したが、宰相は門を通り抜けようとしたとき、肉体の一部を切り落とされ、そして暗殺者の残党とともに殺された。この陰謀に関わった者は公の面前で死刑に処された。」⁽¹⁷⁾

こうして、スルターン・ムバーラクの暗殺は未遂に終わった。カーリー・ハーンと他の長官たちは、翌日に2度目の忠誠をスルターン・ムハンマドに誓った。カーリー・ハーンはカマル・ハーン(Kamal Khan)の称号とともに宰相に任命された。しばらくの間、デリーに平和が戻ってきた。スルターンは快楽に身を任せ、政務を怠るようになると、次第に国の運営に支障をきたしはじめた。各地で不満が広がり、ついにムルターンのアフガン族が反乱を起こした。その反乱の首謀者はアフガン族の若き指導者バフロール・ローディーであった。彼は、叔父のイスラーム・ハーン・ローディーが亡くなると、ムルターンの支配を継承し、その後シルヒンドを奪い、ラーホール、デパルプール、そしてパーニパットの南までのすべての領土を手に入れた。こうした動きに対してスルターンはバフロール・ローディーの制圧に乗り出した。一時は制圧に成功したが、スルターン軍が撤退すると、すぐに勢力を盛り返し、再び領土を手に入れた。⁽¹⁸⁾

こうした状況に対して、スルターンは再び制圧に乗り出し、副宰相のヒッサム・ハーンを軍司令官として送ったが、反対に打ち負かされ、仕方なくデリーに退却した。バフロール・ローディーは、スルターンに「反乱の原因はヒッサム・ハーンの陰謀によるもので、もしあなた(スルターン)がヒッサム・ハーンを殺せば、私は武器を捨てましょう」という内容の手紙を送った。スルターンはとても気が弱かったので、この傲慢な提案に耳を傾けてしまい、副宰相ヒッサム・ハーンを殺すよう命令を下した。それだけではなく、スルターンは宰相カーリー・ハーンの官職を奪い、それを宦官ハמיד・ハーンに与え、ヒッサム・ハーン的称号もつ副宰相も兼任させた。⁽¹⁹⁾

こうしたスルターンの愚かな行為を知った地方の支配者たちは、王の失脚を予想し、何とか自分たちの独立を堅固なものにしようと奔走した。動乱が続きそうだと予感した農民や地主たちもまた、漠然とした混乱の最中で、生活や収入を確保しようとして税の支払いを保留にするなど、自己防衛に走った。そんな中、1440年にマールワー国のスルターン、マフムード・ハルジー(Mahmood Khilji)がデリーに攻めてきた。パニックに陥ったスルターン・ムハンマドは、直ちにバフロール・ローディーの下に助勢を懇願する使者を送った。デリー軍は敵よりもかなり優勢であったが、スルターン不在のデリー軍が崩れると、戦場にはバフロール・ローディー軍だけが残って戦っていた。バフロール・ローディー軍とマールワー軍との交戦は決着がつかない膠着状態に陥っていた。ある夜、マフムード・ハルジーは不吉な夢を見て不安になり、平和裏に戦争が終わることを望むように

なった。そんな中、デリーの宮中にいたスルターン・ムハンマドもまた恐怖に慄いていた。それほど理由もないのに、宰相たちの忠告を無視して、敵であるマフムード・ハルジーが求めた物を贈物として使者に持たせた。

マフムード・ハルジーは、この申し入れを大いに喜び、和平調停を済ますと、デリーを離れた。これを聞いたバフロール・ローディーはスルターン・ムハンマドへの軽蔑から大胆にも王位への熱望を抱きはじめた。バフロール・ローディーは、マールワー王、スルターン・マフムード・ハルジーを追撃し、打ち負かせると、その贈物も彼らの荷物もすべて奪い取った。この尽力に対して、スルターン・ムハンマドは彼に「ハーネ・ジャハーン」の称号を与え、自分の息子として養子にさえ迎えた。⁽²⁰⁾

こうして、スルターン・ムハンマドの治世下に置いて、バフロール・ローディーの影響力は強まっていき、彼の軍はアフガン部族の数多くの主力部隊を抱えるまでに成長していった。しかし、まだデリーを征服するまでには至っていなかった。スルターン・ムハンマドの勢力が急速に衰えていくと、意志が弱く、決断力がなく、放蕩な生活を送っていたスルターン・ムハンマドは病に侵され、1445年に12年余りの支配に幕を閉じた。彼の息子、アラウッディーンがその後継者となった。

現在もなお、スルターン・ムハンマド・シャーの墓とされる八角形の墓建築(図9)はローディー公園内にある。八角形の墓室の周囲に周廊を持つ様式はテランガーニーやムバーラクの墓にも共通するもので、恐らくこの慣習を継承したものと言える。



図9 ムハンマド・シャーのものとしてされる墓
(ローディー公園内)

(4) アラウッディーン(在位1445-51年)

1445年、スルターン・ムハンマドが亡くなると、息子のアラウッディーンが王位を継承した。すでにスルターンの評判は地に落ちていた。口汚い民衆は、「アラウッディーンは父よりもさらに気の弱い軟弱者だ」と口ぐちに罵った。この時代のインドには、トゥグルク朝衰退以降、デカン、グジャラート、マールワー、ジャウンプル、ベンガルにはそれぞれスルターンを擁する独立国を形成していた。もともとパンジャーブ、デパルプール、シルヒンドはバフロール・ローディーの領土であった。デリー郊外の領土まで他の支配者のものとなっていた。つまり、アラウッディーンのアラウッディーン朝はデリーのわずかな領土だけがスルターンのものであった。⁽²¹⁾

アラウッディーンは失った領土を何とか奪還したいと考え、デリー近隣の諸部族の長を招き協

議を開いたが、彼らはスルターンの一層の衰退を願っていたので、スルターンに次のような進言をした。「貴族たちはあなたの宰相ハミード・ハーンに嫌悪を抱いている。彼を宰相の座から降ろし投獄すれば、我々はあなたを支援する準備がある。またあなたの統治の仕事はより好ましい状況になることは間違いない」と述べた。これらの反逆者の口車に乗ったスルターン・アラウッディーンは愚かにも、宰相を投獄し失脚させた。そして宮廷をバダーユーン(デリーから東南約200km)に移す準備をするよう命令を下した。それに対して彼の有能な友人たちは、「こんな大事なときに、デリーを放棄するなど、それがいかに愚かなことか」と強く反対したが、その諫言に耳を貸さず、彼を止めることはできなかった。⁽²²⁾

アラウッディーンは首都デリーには宰相ハミード・ハーンを残し、バダーユーンというデリーの東にある町に都を置いて、そこで暮らした。首都デリーに宰相ハミード・ハーンがいることは、バフロール・ローディーにとって極めて不都合な事態であった。そこで、バフロール・ローディーはアラウッディーンに次のような手紙を送った。「首都デリーを守る唯一の目的はデリーから宰相ハミード・ハーンを追放することです」。これに対して、アラウッディーンは、「私の父、ムハンマドがあなたを自分の息子(養子)とした以上、私もまたあなたを兄弟として認めております。バダーユーンを所有しそこで静かに暮らすことを約束するという条件なら、あなたに王位は譲ります」という手紙を送った。⁽²³⁾

こうして、1451年にバフロール・ローディーはデリーで王位に就いた。1478年にアラウッディーンはバダーユーンで静かな生涯を閉じた。なぜバダーユーンにあれほど固執したのかは分らないが、バダーユーンは著名なスーフィー指導者ニザームッディーンの生誕の地である。デリー・スルターン朝において自ら退位したスルターンは珍しく、彼の治世は7年ほどであったが、退位後も28年余り生きながらえたスルターンも稀有であったといえる。アラウッディーンの墓廟については不明である。

2. ローディー朝

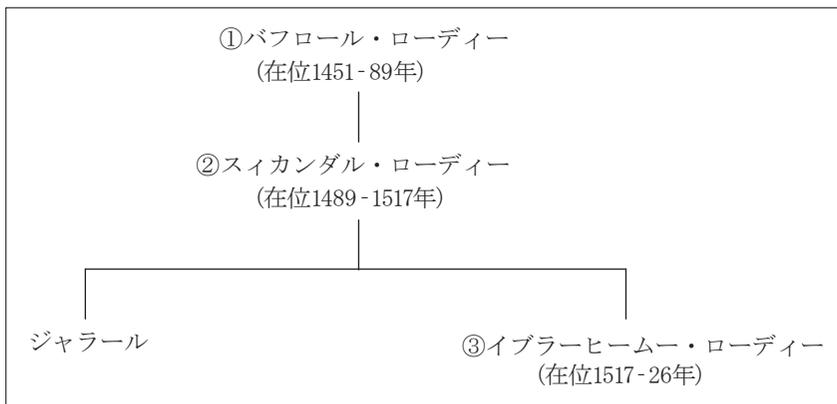


図10 ローディー朝の系譜

(1)バフロール・ローディー(在位1451-89年)

昔、アフガン諸部族は商団を形成し、ペルシアとインドの間の貿易を営んでいたと言われていた。フィロズ・シャー・トゥグルクの時代、バフロールの祖父、マリク・ベラムは兄から独立

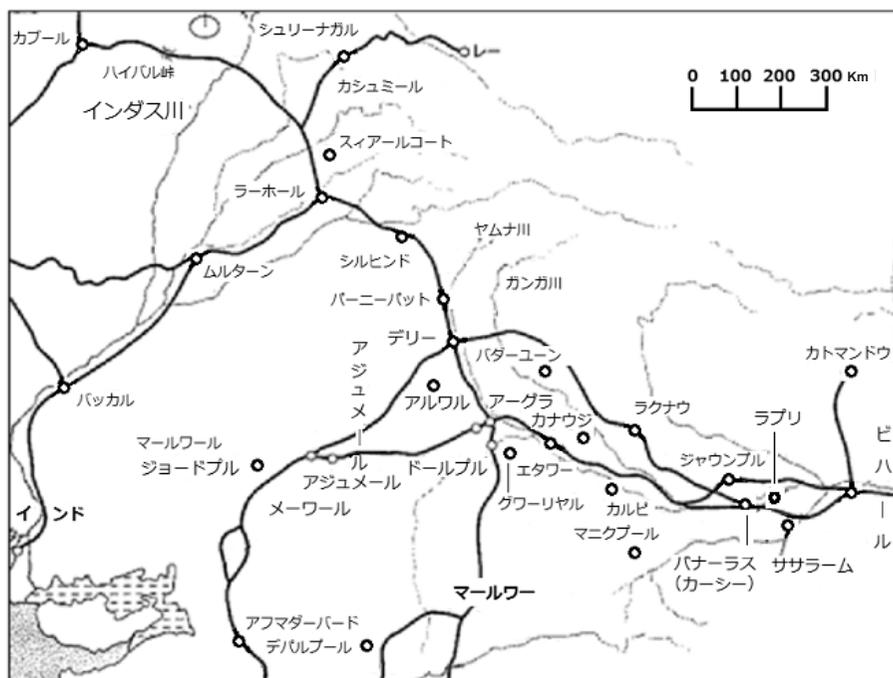


図11 16世紀前半頃の北インド

し、のちにムルターンを支配した。マリク・ベラムには5人の息子がいた。その一人、マリク・カラ (Maik Kaly) がバフロール・ローディーの父であった。父マリク・カラが戦死すると、叔父のマリク・スルターン (イスラーム・ハーンの称号) の下に身を寄せ、戦いで優れた活躍により、のちにイスラーム・ハーンの娘を娶った。イスラーム・ハーンはサイド・ヒズル・ハーン支配下のパンジャブのシルヒンドの軍司令官を務めていた。彼が死ぬとき、実の息子たちがいたにも関わらず、マリク・バフロールをその後継者に任命した。⁽²⁴⁾

マリク・バフロールが若かった時、シェーダーという有名なスーフィー遊行者 (ダルヴィーシュ、ファキール) に敬意訪問が許されたときの逸話が残されている。

「ダルヴィーシュの前に尊敬の姿勢で座していると、ダルヴィーシュは大きな声を上げ、恍惚の状態で、デリーの王国のために2000ルピーを与えるものはいないか。彼 (バフロール) は1600ルピーしか持っていませんと答えた。それを召使いに直ちに持って来させ、ダルヴィーシュに差し出した。そのお金を受け取ると、ダルヴィーシュは彼の頭の上に手を置いて、『そちは王になれ、私の息子よ』と言った。彼の仲間たちはこの振舞いに対して彼を大いに物笑いにした。しかし彼は、『これが実現するならば安い買い物だ。もし実現しなくても聖者の祝福が害をなすことはない』と言った。」⁽²⁵⁾

マールワールのスルターン・マフムード・ハルジーがデリーへ行軍すると、スルターン・ムハンマドはバフロールに自軍に合流するよう要請を送った。バフロールは、スルターン・マフムード・ハルジーの軍を追い詰め、蹴散らした。その功績に対して、スルターン・ムハンマドはバフロールに

「ハーン・ハナーン」(Khan Khanan)の称号を与えた。一旦シルヒンドに戻ると、自分の領土に隣接するスルターン・ムハンマドの支配地域、ラーホールやデパルプール、サーナムなどを手中に収めた。それにも満足せず、ついにデリーに向けて行軍し、デリーを包囲した。しかしその企ては失敗に終わり、シルヒンドに撤退せざるを得なかった。

しばらく、1445年に突然スルターン・ムハンマドが亡くなり、息子のアラウッディーン(在位1445-51年)が王位を継承した。数年後、アラウッディーン(在位1445-51年)の放蕩生活により政務が滞り、国の運営が困難になると、宰相ハミード・ハーンはバフロールをデリーに招き、スルターンの称号を与えた。政権の運営は宰相ハミード・ハーンに任せられ、依然として大きな影響力を持っていた。バフロールもまた彼に対して常に尊敬の念をもって接していた。

ある日のこと、ハミード・ハーンの大邸宅で宴会が開かれた。そのとき、バフロールはアフガン族の兵士たちに、客や召使いの面前で無礼な振舞いし、お道化ものを演じるよう命じた。ハミード・ハーンや集まった客は、こうした行いは決して宮廷では暮らせない、よそ者(侵入者)である彼らの無知の所為だと考えた。しかしこれは、バフロールの計画的な企てであった。宰相ハミード・ハーンや古くからの貴族たちは、アフガン族が宮廷や政権の中枢に入ることを快く思っていなかったことをバフロールは知っていた。それで、一芝居打って、ハミード・ハーンを捕え、政権から追放したのであった。⁽²⁶⁾

その後、バフロールの治世はジャウンプルのシャルキー王国のスルターン・シャー・シャルキーとその後継者フサイン・シャーとの長く執拗な戦いに費やされた。シャルキー王国の始まりは、フィーローズ・シャー・トゥグルクの貴族で、しばらくの間彼の宰相をやっていたマリク・サルワルが、東部地域に任じられた。その地域で彼の後継者が建てた王国であった。

シャルキー王国(1394-1479)は、ジャウンプル(東部ウッタール・プラデーシュ)を首都とし、そこには壮麗な宮殿やモスク、霊廟が建てられ、バーザールなどもある小規模のイスラーム都市であった。現在でも、当時建立されたモスクや霊廟のうち2・3のものだけが残っている。⁽²⁷⁾ ジャウンプル城(図12)は1360年にフィーローズ・シャー・トゥグルクによって築かれた城砦であるが、後にシャルキー朝の都となった。高い門や巨大なアーチによって特徴づけられる独特の様式を備えている。アタラ・モスク(図14)は1408年にアタラ・デヴィー神を祀るヒンドゥー寺院を取り壊し、その部材を使って建てたモスクである。最後のシャルキー王が建立したジャウンプルで最大のモスク(ジャーミ・マスジド、1478年)(図15)である。



図12 ジャウンプル城



図13 ジャウンプル城の内庭のモスク



図14 アタラ・モスク(1408年)



図15 ジャーミ・マスジド(1478年)

1479年に、ようやくバフロールはジャウンブルを占領し、シャルキー王朝を併合した。バフロールもまた年を取り、次第に体も弱っていったので、自分の領地を息子たちに分け与えた。バルバク・ハーンにはジャウンブルを、アーラム・ハーンにはクッラーとマニクプールを、アズム・フマユーンにはラクナウとカルピが割り当てられた。そしてニザム・ハーン(後のスィカンダル)には、ドアーブの地域のいくつかとデリーが与えられ、同時に後継者に任命された。

1488年に、バフロールは遠征地のバドゥリ(Badowly)という町で亡くなり、38年余りという長きにわたる支配が終わった。バフロールの性格について、フィリシュタは次のように記述している。

「バフロール・ローディーは、高潔で温厚な王子であった。知識の及ぶ限り正義を行い、臣民を家来というよりもむしろ仲間として扱った。王位につくと、財産を友人たちに広く分け与えた。そして王の威厳を見せつけることはなく、自分が王であることが世に知れ渡っていればそれで十分だと言って、めったに玉座に上ることはなかった。彼の食事はきわめて質素で、めったに宮殿で食べることはなかった。彼は文学的教養などまったくなかったが、学識者たちを好み、彼らの功績によって報酬を与えた。(中略)。彼はイスラーム法に精通してだけでなく、賢く勇敢な君主であった。彼はまた、政治秩序を維持するための最善の制度をつねに学び、それをいつも実行していた。彼は何事にも慎重で、とくに国の諸事において、早計に判断しないよう常に論していた。そして実際、生活全般にわたる彼の行動を見れば、その資質がどのくらい実践されたか十分に表わされている。」⁽²⁸⁾

バフロール・ローディーは、部下のアフガンに対しては、同族の中の指導者の一人に過ぎないという姿勢を一貫して崩さなかった。その一方で、イスラームへの信仰が厚く、質素な生活を旨とし、アフガンであることを誇りとしていた。とくにバフロール・ローディーのものとされる墓(図16・17)のすぐ近くに有名なスーフイー聖者ナスィールッディーンの聖廟があることから、バフロール性格と生き方がよく表れている気がする。

(2) スィカンダル・ローディー(在位1489-1517年)

バフロール・ローディーが亡くなるとすぐに、後継者を巡って激しい駆け引きが繰り広げられた。孫のアズィム・フマユーン(Azim Hoomayoon)が就くべきだという貴族もいれば、亡き王の長男

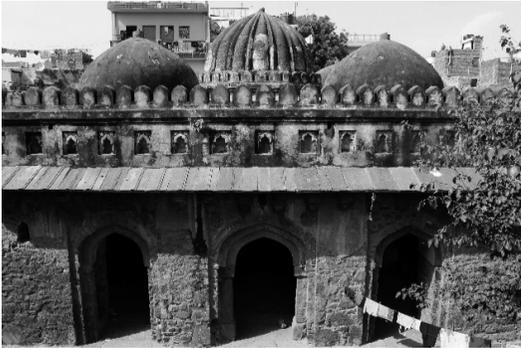


図16 バフロール・ローディーのものとする墓(チラグ・デリー)



図17 バフロール・ローディーの墓の内部



図18 シーシュ・グンバド、バフロールのものとして推定される墓(ローディー公園内)



図19 シーシュ・グンバド内の墓

バルバク・ハーン(Barbak Khan)が就くべきだという貴族もいた。貴族たちが後継者について議論している最中に、ニザーム・ハーン(のちのスイカンダル)の母ズィナ(金細工師の美しい娘で王の側室となった)が息子のために、集まった人たちにカーテンの背後から口出した。それに対して、バフロール・ハーンの甥イーサ・ハーン(Eesa Khan)は、「金細工師の息子が国を支配するとは何ということだ。『猿のやることは所詮猿真似にすぎない』ということわざもあるからね」と嘲笑した。⁽²⁹⁾

ニザーム・ハーンが権力を掌握するのは容易なことではなかった。部族の自主・独立を尊重するというアフガン人特有の性質と、金細工職のカーストに属するヒンドゥーの女から生まれたというニザーム・ハーン自身の出生、いわば生粋のアフガン人でなかったことと深く関連していたのかもしれない。ニザーム・ハーン之母は美しかった故に側室に迎えられたが、ヒンドゥーであるというその出自がニザーム・ハーン-の性格やイスラームの信仰に大きく影響していたのではないかと思われる。ニザーム・ハーンは王位に就く前に、王が臣民の宗教に干渉したり、長年慣れ親しんだ場所で沐浴したりするのを妨げりするのはきわめて不適切であると主張する聖者と一度口論になったことがあった。

「王子ニザーム・ハーン(のちのスイカンダル)は刀を抜いて、『こやつ、ヒンドゥー教の慣例を擁護するのか』と言うと、聖者は『決してそうではありません』『どんなことがあっても、

王というものは自分の臣民を迫害すべきではありません』と応えた。それを聞いて、王子ニザーム・ハーンの心は静まった。」⁽³⁰⁾

ニザーム・ハーンに敵対する勢力は存在していたが、多くのアフガン人族長や貴族の支持を得て、ニザーム・ハーンは1489年に父の王位を継承し、スィカンダル・シャーの称号を名乗った。王位に就くと直ちに、彼の権威を認めない勢力に対して軍を進め、制圧に乗り出した。その反対勢力の中心であったのは主にスィカンダルの血族であった。弟のアラム・ハーン(ラブリ総督)、従兄弟のアザーム・フマーユーン(カルピ総督)、バフロールの甥のイーサ・ハーン、兄のバルバク・ハーン(ジャウンブル統治者)と言った面々であった。スィカンダルは出来る限り戦争を避け、極力平和裏に解決しようとした。たとえ戦争に訴えて相手が負けた場合でも、スィカンダルの情けにすぎり、服従の姿勢を示せば、その反抗の罪は許され、寛大な処置が下された。つまりスィカンダルは、アフガン人族長たちの権力を抑える一方で、自らの権威を高めることに腐心していたのである。

ただし、兄のバルバクの場合はそう簡単ではなかった。スィカンダルは兄バルバクに、使節を送り忠誠を誓うよう、また金曜集団礼拝などの説教(フトバ)の際には、最初にスィカンダルの名前を読み上げるよう要求した。しかし兄バルバクはそれらの提案を拒否したので、戦争となった。その戦闘中にバルバクの将軍カーラー・パハール(Kala P'har)は捕虜となった。スィカンダル・ローディーがカーラー・パハール将軍を受け入れるときの様子を、フィリシュタは次のように記述している。

「スィカンダル・ローディーは、彼を見ると馬から降りて彼を抱きしめ、『私はあなたを父のように尊敬している』と語り掛け、そして『私をあなたの息子としてみなしてほしい』と懇願した。この予期せぬ敬意に圧倒されたカーラー・パハールは、『私はこの命のほかには返礼としてあなたに差し出すものは何もありません』と応えた。彼はきっと仕えることになり、報恩の念を表す機会はきっとあると確信していた。彼は王の馬の一頭に乘せられると、直ちに騎兵隊の先頭に立って突撃し、大いに王の軍を勝利に導いた。バルバク軍は、カーラー・パハールが自分たちに突撃してくるのを見て、あらゆる部隊が、彼が敵に寝返ったと考えて逃げ去った。」⁽³¹⁾

兄バルバクはカーラー・パハール将軍の寝返りによって窮地に立たされた。彼の息子ムバーラク・ハーンも捕えられ、敗走したが、結局バルバクは降伏した。彼は寛大な行為で受け入れられ、敬意をもって扱われた。こうした貴族勢力を抑えるために、スィカンダル・ローディーが行った手法について、荒松雄は、「アフガン諸部族に特有な自主独立の性格をよくみぬき、一方で、族長たちをスルターンへの支配へ服従させることを意図しながらも、他方では、部族制の伝統的性格をともかくも尊重するという慎重な姿勢をとったのである。その結果において、スィカンダルは、スルターンの権威を徐々に高めながら、貴族勢力を抑える方向へ持っていくことに成功したといえる」と評価を与えている。⁽³²⁾ ただ、荒松雄も指摘しているが、当時のアフガン人支配者は「頭が固く、しかも自由を好む人たち」であったので、スィカンダルの手法をもってしても、思うようには抑えられなかったというのが実状であろう。

スィカンダルはアフガン人支配者だけでなく、ラージプート族やヒンドゥー教徒に対しても対処する必要性に迫られていた。とくにグワーリヤルは問題のある地であった。グワーリヤルは古代より栄えたヒンドゥー教徒の都市であったが、デリーに北インド支配の拠点築いたイルトゥトミ

シュにより1232年に征服されて以降、ムスリム勢力の支配地となった。のちにラージプート族のマーン・シング(1486-1517)が藩王国を築いていた。当時グワーリヤルは、ローディー朝の権威を認めない族長や貴族たちが宮廷から追放されたり逃げ込んだりする避難場所になっていた。今日、町の中央丘陵上に残る城址(図20)は、藩王国マーン・シング(1486-1517)の築いたもので、城壁の下部の洞窟寺院には当時のヒンドゥー教・ジャイナ教の神像が多く刻まれている。



図20 グワーリヤル

1501年、スィカンダルはマーン・シングに宮廷から追放されたり逃げてきたりした貴族たちを引き渡すよう要求した。それを実行する代わりに、マーン・シングは自らの保護を求めると同時に、スィカンダルの機嫌をとるために高価な贈物を持たせて代理として息子のヴィクラマジトを派遣した。しかし、グワーリヤルへの包囲網は次第に狭められていった。ついに1516年にデリーのローディー朝の手に落ちた。

スィカンダルにとって悩ましいもう一つの問題はヒンドゥー教徒への対応であった。スィカンダルは敬虔なムスリムであったので、ヒンドゥーへの対応はかなり厳しいものであった。あるとき、バラモン(司祭階級)の1人が、「信仰のせいでムスリムによって厳しく批判されたヒンドゥーの1人がムスリムの宗教もヒンドゥーの宗教も、誠意に基づいて行動すれば、等しく神に受け入れられる」と主張した。この意見はヒンドゥーのバラモン層に広く支持され、ムスリムとヒンドゥーとの公開討論へと発展した。結局、ムスリム学識者集団の結論は、「ヒンドゥー教徒がムスリムの神と同様にヒンドゥーの神も等しく容認すべきである」と主張した不信心者が、もしその間違いを認めずムスリムの信仰を受け入れない場合、不信心者は死を受けるべきだというものであった。改宗を拒否したヒンドゥー教徒は、それゆえ殺される結果となった。⁽³³⁾

ヒンドゥー教徒に対する迫害は公開討論の場に留まらなかった。ある時、スィカンダルは、マトゥラーの町で、川に通じる沐浴場の反対にマスジドやバーザールを建設させた。そしてヒンドゥー教徒がそこで沐浴することを決して許してはならないと命じた。またヒンドゥー教徒が巡礼の際の慣例を止めさせるために、理髪師が髭や頭髪を剃るのを禁じたりした。⁽³⁴⁾さらにスィカンダルは偶像を破壊し、ヒンドゥー寺院をモスクに作り変えたりした。おそらく当時はすでに、イスラーム文化とヒンドゥー文化の融合ないし折衷傾向がかなり進んでいたと推定される。こうした状況をスィカンダルは阻止し警告を与えることが自分の使命であると信じることで、ヒンドゥーという自分の出自を葬り去りたかったのかもしれない。

スィカンダルは、あらゆる形でイスラーム化と中央集権化を押し進めようとしたスルターンで

あった。彼の支配地域中に、ヒンドゥー寺院をモスクに改築したり、新しい様式のモスクを建てたりした。また学問を大いに奨励した。今まで決してペルシア語を学ぼうとしなかったヒンドゥーでさえ、この治世においてイスラーム文学を学び始めた。軍の司令官たちも文字を覚え、教養を十分備えるようになり、戦争の専門家(職業軍人)として新たな性格を帯びはじめた。昇進の際には、すべての将軍の血統や教育が確認されるようになった。またスィカンダルは国中に站(駅)を設け、そこには活動に関するあらゆる報告が集められ、スィカンダルの下に届くようになっていた。布告を出す必要がある場合は、この基地を経由して、各地のモスクに送られ、金曜集団礼拝の際にその布告を皆の前で読ませた。さらにスィカンダルは軍、法廷、主要な都市に関する報告書には必ず目を通し、自分の出した命令が剥落していないか、訂正ないかを確認していた。法の複雑な事例に関して、うんざりするほど頻繁に長い質問をし、それらを自ら解決した。⁽³⁵⁾

スィカンダルは極めて有能な官僚としての資質を備えており、その一方で詩人であり、極めて鑑識力のある文学的素養も備えた教養人でもあった。彼の治世には、散文や詩に関する多くの作品が作りだされた。その作品の中には、スィカンダルが統治した28年と5か月を記述した作品、『フランク・スィカンダル』がある。スィカンダルの容姿と性格について、フィリシュタは次のように記述している。

「豊かな学識と良識に溢れる知性と同様に、端麗な顔立ちのよさという点で際立っていた。彼の支配期間、あらゆる生活用品が安く豊富であった。その領土には、平和が行き渡っていた。彼は公開の場で不平を聞くために、ある一定の時間を割くのを忘れることなど決してなかった。そして決められた食事の時間や休憩時間さえ忘れて一日中政務に没頭することもしばしばあった。また、決まった時刻に日に5回、礼拝をすることも習慣になっていた。彼は政務にあたって極めて公平で、個人的感情に動かされることはめったになかった。」⁽³⁶⁾

スィカンダルは確かに、中央集権化を進めローディー朝の威信を高めたが、その一方でラージプートなど他の種族やヒンドゥー教徒を敵に回したことも事実である。またスィカンダルの貴族や高官などへの施与地の授与は、スルターンの財政を崩壊させる原因となった。なお、スィカンダルは、政治的・軍事的要衝という理由からアグラの北西10kmに、「スィカンドラ」という新都市を建設した。フィリシュタの記述によれば、「スィカンダルは1504年頃に新都市スィカンドラを建設した。翌年、アグラで大地震が起これ、大地は鳴動し、高い建物は崩れ落ち、何千という住民がその生き埋めになった。このような大地震はかつてインドで経験したことがないものであった。」⁽³⁷⁾ この大地震が原因であったかどうかは分からないが、現在その遺構は何も残っていない。スィカンダルは1517年、この地で没したが、その墓はデリーのローディー公園内にあり、「スィカンドラ」という名前だけがこの町に残った。

(3) イブラーヒーム・ローディー(在位1517-26年)

スィカンダル・ローディーが1517年にアグラで亡くなると、その息子イブラーヒーム・ローディーが王位を継承した。王位に就いた当初、イブラーヒーム・ローディーは王と臣下の関係を公平かつ厳格に定め、スルターン権力の専制化を推し進めようとした。イブラーヒームの支配に対する姿勢について、フィリシュタは次のように記述している。



図21 スィカンドル・ローディーの墓
(ローディー公園内)



図22 スィカンドル・ローディーの墓の囲壁

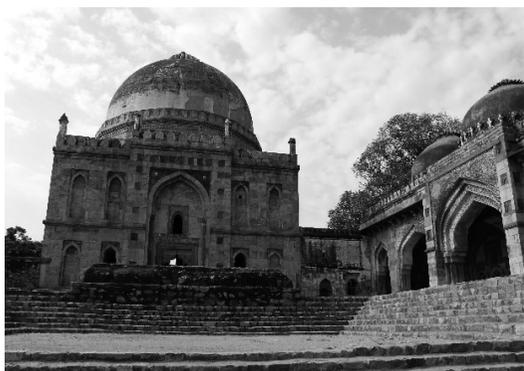


図23 バラー・グンバド・モスク
(ローディー公園内)

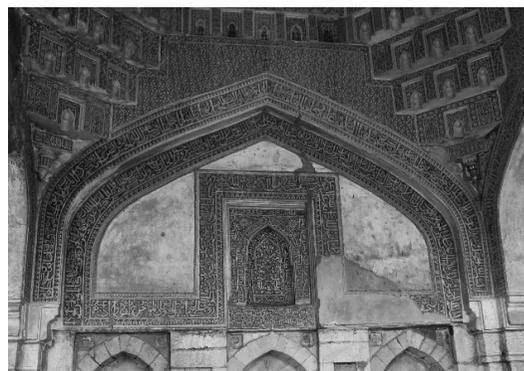


図24 バラー・ダンバド・モスクの礼拝室

「イブラーヒームは、祖父や父親が行ってきた慣習に反して、自分と同じ部族の士官であろうが、他の部族の士官であろうが、まったく差別しなかった。『王たるものは親族も同族も持つべきではない。誰もが国家の臣民や召使とみされるべきだ』と公言して憚らなかった。そして、これまで彼の面前に座ることが許されていたアフガン人の族長たちは、胸の前で両手を組んでまゝ、やむをえず玉座の前に立たざるを得なかった。」⁽³⁸⁾

イブラーヒームの独り善がりの中央集権化は、従来の慣習を重んじ、独立心の強いアフガン人諸貴族たちに多くの敵を作ることになった。イブラーヒームがアグラで即位するとすぐに、不平不満を抱いていたアフガン人貴族たち、とりわけ先代王スィカンドル・ローディーに仕えていた大臣や貴族たちは共謀して、イブラーヒームの弟ジャラル・ハーンを都ジャウンプル(東部ウッタラプラデーシュ)で王位に就かせようと画策をした。彼らはジャウンプルとアグラにそれぞれ都を置き、ローディー朝の領土を兄弟それぞれで分割統治することで、イブラーヒームを牽制し、権力の主導権を握ろうとした。しかし、その陰謀を見破ったイブラーヒームは、まず弟ジャラルの説得を試みた。それが失敗に終わると、国家の反逆者、ジャラルを強固に支持している元大臣や貴族、そして配下の者すべてに対して宣戦布告する一方で、贈物と代理者を送るという巧みな交渉術で、次第に彼らはイブラーヒームの側に付きはじめた。結局、ジャラルは自らの権力基盤を築けないま

ま、自軍からさえ見放され、グワーリヤルのラージャ(王)に保護を求めざるを得なかった。⁽³⁹⁾

ジャラルがグワーリヤルに避難してことが分ると、イブラーヒームは直ちに軍を送り、グワーリヤルを包囲攻撃させた。しかし、ジャラルはいち早くマールワー(現マディヤ・プラデーシュ州の南西端一帯の地方名)のスルターン・ムハンマド・ハルジーの宮廷に逃げ込んだ。マールワーのスルターン・ムハンマド・ハルジーから十分な処遇を受けられなかったジャラルは、グラーコタのラージャ(王)の下に逃げようとしたその途上でゴンド族に捕えられ、イブラーヒームの陣地に押送された。イブラーヒームは弟ジャラルをほかの兄弟が監禁されているハンスィーの要塞に送った。その途中で秘密裏に暗殺するよう命じた。イブラーヒームの怒りは弟の死だけでは満足せず、ジャラルに仕えていた数人の士官たちもイブラーヒームの手で処刑された。⁽⁴⁰⁾

イブラーヒームは自らの意に反する者や疑念を抱かせる者は、たとえイブラーヒームの側に属する者でさえ、容赦なく監禁され、処刑され、暗殺された。こうした味方に対するイブラーヒームの疑心暗鬼は、結果的に味方内部に反乱を引き起こさせた。反乱軍は鎮圧されたが、その首謀者と関係者、先代王スィカンダル・ローディーに仕えていた貴族の多くが処刑された。これらの処分は貴族の間だけでなく、ほかの多くの族長の間にも不信を生み出し、新たな反乱の引き金となった。

イブラーヒームの裏切りに対する残忍な手口は、より多くの敵をつくることになったただけであった。ローディー貴族の有力な一人であったパンジャープ総督ダウラト・ハーン(Dowlut Khan)も、イブラーヒームの独裁的で残虐な性格にどう対応すべきか迷っていた。結局、バーブルのインド侵入に手を貸す裏切り者となった。年代記作者のアフマド・ヤディガルはその経緯について記述を残しているが、それを要約すると以下のようなものである。

「パンジャープ総督のダウラト・ハーンは、ラーホールからデリーに来るようスルターン・イブラーヒームに呼びつけられていた。しかしダウラト・ハーンは行くのを渋っていた。それで自分の息子、ディラワール・ハーン(Dilawar Khan)を代わりに送ることにした。イブラーヒームは『なぜ父親本人が出向いて来ないのか』とディラワール・ハーンに尋ねた。ディラワール・ハーンは、『この後すぐに宝物を持って参上すると思います』と答えた。『父親が来なければ、他の貴族同様捕らわれることになるが』と言われた。それからスルターンは、壁から数人の貴族が吊るされているのを彼に見せるために、わざと地下牢に連れて行くように命じた。ディラワール・ハーンはこの身の毛もよだつ光景を目撃すると、あまりの恐怖で身震いがした。イブラーヒームは、『私に逆らった者がどうなるかを見てきたな、逆らえばお前も赤熱した千枚通しで目を潰し、壁に立てかけて吊すつもりだ』とディラワール・ハーンに言った。ディラワール・ハーンは自分の運命のように恐れて、デリーの宮廷から逃げ出し、急いでラーホールに戻って事情を父ダウラト・ハーンに報告した。

それを聞いたダウラト・ハーンは以前からの懸念を一層強めた。もし私が反乱を起せば恩知らずだと責められるだろう。もし私がスルターンの激怒に触れば、生きてはいられないだろうと何度も考えた末、ついに彼は他の支配者、バーブルへの忠誠を申し出ることを決心した。したがって、ダウラト・ハーンはイブラーヒームの邪悪な性格、貴族や士官の間に充満している不満、軍隊の反感などを詳細にバーブルに知らせ、彼にインドに侵入することを請うために、ディラワール・ハーンをバーブル・シャーの下に送った。

ディラワール・ハーンは直ちに出かけると、10日ほどでカーブルに着いた。謁見が許されたディラワール・ハーンは、嘆願者として、過酷な支配によるインドの窮状を詳しく説明し

た。するとバーブルは、あなた方は皆、長い間ローディー朝に仕えてきたのに、なぜすぐにスルターン・イブラーヒームを見捨て、わが宮殿に救いを求めるのか。確かに40年もの間、私の一族はローディー朝に仕え、この王朝の基盤を強くするために尽力してきました。しかしスルターン・イブラーヒームは、父スィカンドル・ローディーに仕えていた貴族に対して酷い扱いをし、理由もなしに彼らの20分の3を殺し、その中には壁から吊るされる者もいれば、生きたまま焼かれる者もいました。スルターン・イブラーヒームの支配下にいる限り、命の保証はないと悟った多くの貴族たちは、あなたに従う準備があることを伝えるためにやってきました。彼らは皆、あなたが来るのを不安な面持ちで待っています。」⁽⁴¹⁾

バーブルはインドへの侵入を決意した。1526年イブラーヒーム・ローディー軍は、10万の騎馬隊と1000頭の象部隊から構成されていた。バーブルの軍は1万2千を超える兵力はなかったが、バーブルは5千の騎馬隊で夜にインド人のキャンプを急襲する作戦を行った。しかし警戒していた敵に見つかり、この企ては失敗に終わった。こうした状況はイブラーヒーム・ローディーを全面的な軍事行動を起こさせる勇気を与えた。それゆえ彼は翌朝パーニーパットに進軍した。同時にバーブルもイブラーヒーム・ローディーの野営地の12マイルの範囲内に行軍した。⁽⁴²⁾ 結局、イブラーヒーム・ローディーの軍は戦いに破れ、ローディー朝は滅んだ。最後のスルターン・イブラーヒームの墓所については、今日なおその所在は判明していない。

3. ムガル帝国

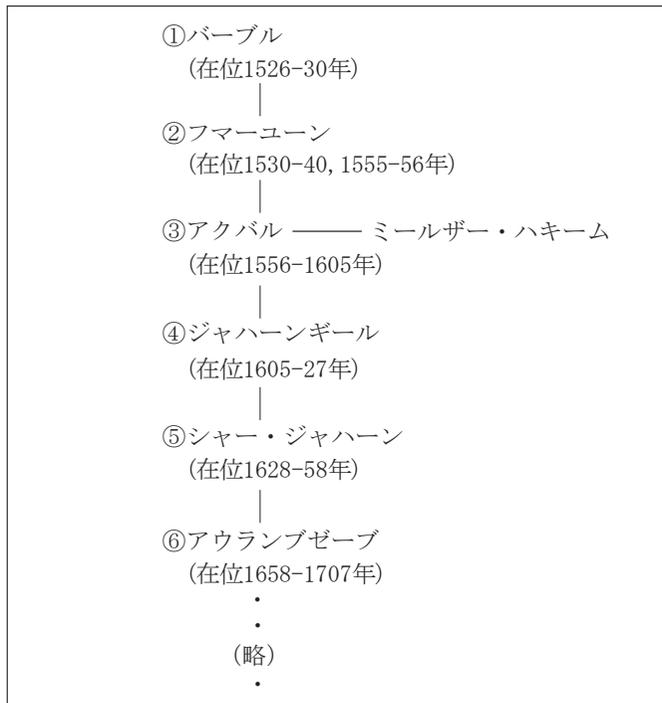


図25 ムガル帝国の系図

(1) バーブル(在位1526-1530年)

インドにムガル朝を創設したバーブルの出自を述べるならば、父はティムールの血をひくアブー・サイード・ミルザーの息子で、母はチンギス・ハーンの子孫で、ユヌス・ハーンの孫に当たる。バーブルは、ティムールとチンギス・ハーンという歴史的な人物を先祖に持って生まれたのであった。しかし輝かしい出自とは裏腹に彼の人生は厳しいものであった。⁽⁴³⁾ バーブルの幼少期には、中央アジアのサマルカンドを都としていたティムール帝国(1370-1507)はすでに凋落の一途を辿っていた。バーブルは中央アジア・サマルカンドの支配者となってティムール帝国の栄光と威信を取り戻そうと、その地を3回も征服している。だが、3回とも奪われ、結局サマルカンドにティムール帝国を再興することはできなかった。以後中央アジアへの活動の道は完全に閉ざされたが、アフガニスタン(カーブル)に拠点を築くと、6回にも及ぶインド遠征を行っている。バーブルはインドの地をティムール朝のような帝国の実現を夢見ていたのであろうか。

インドへの遠征(侵攻)はバーブルに始まったわけではない。ティムールもまたモンゴル帝国の再興をめざして大遠征を行っている。その中には、インド遠征も含まれていた。1398年、ティムールは自ら騎兵の大軍を率いてインドに侵攻し、デリー滞在わずか10日余りで、恐ろしいほどの略奪と虐殺、破壊の限りをつくし、膨大な戦利品と多数の捕虜と優れたインド人職人・技術者を引き連れ、サマルカンドに帰還した。彼のインド侵攻は、後の歴史家から「有史以来最大の虐殺事件」と言われ、その結果、当時のトゥグルク朝に甚大な被害を与え、トゥグルク朝崩壊の原因になったといわれる。⁽⁴⁴⁾

ティムールのインド遠征はインドをモンゴル帝国の再興の地としてではなく、単に財貨の略奪が目的であったといえる。バーブルにとってもインド遠征は、ティムール同様、単に財貨を略奪することが目的であったのであろうか。10世紀以降のインド亜大陸では、今日のアフガニスタン地方にいたトルコ系諸民族が、西北および北インドへの侵入を繰り返していた。都市に侵入し、略奪の限りを尽くし、帰還するというパターンは何度も外来異民族によって踏襲されてきたものであった。⁽⁴⁵⁾ 侵入・征服した地域にとどまり、その地域を拠点として支配権をインド域内で確立・維持してきたのが「デリー・サルタナット」時代であった。バーブルのムガル帝国もまた、侵入・征服し、定住・支配という方策を採ることになるが、インド遠征の当初からそう考えていた訳ではなかったようである。

バーブルは20年の間(1505～1525年)に6回ものインド遠征を行っている。文武の才に優れていたバーブルは、後にトルコ散文学史上最高の傑作される回想録『バーブル・ナーマ』を残している。その中で、バーブルはインド遠征の目的について次のように記述している。

「しかしカーブルは、モグール(モンゴルという語のペルシア語化した形)らが加わって多勢となったバーブルの軍勢を養うには十分な土地ではなかった。このためバーブルは、1505年1/2月、略奪と戦利品獲得を目的に第1次ヒンドゥスターン遠征に向かい、この時初めて、中央アジアとは全く異なったインドの風物を目にして、驚異の思いを禁じ得なかった。」⁽⁴⁶⁾

バーブルのインド遠征はあくまでも略奪と戦利品獲得が目的であったことは明らかである。ところが、ローディー朝のスルターン・イブラーヒームの叔父アーラム・ハーンから、スルターン・イブラーヒームに対する戦いに援軍として加わるよう要請があると、この要請に応える形で、バーブルは第5次・6次インドの遠征を行っている。その結果、バーブルはこれまでの略奪を目的とした

インド遠征とは性格を異にするインド遠征を計画することになった。⁽⁴⁷⁾

インドに第6次遠征したバーブルは、1526年のパーニーパットでデリーのローディー朝のスルターン・イブラーヒームの軍勢を撃破して、デリーとアグラを占領した。ここからインド遠征の目的が略奪から支配・定着へと本格的に展開することになるが、そこに至る道のりは平坦なものではなかった。バーブルに最もインドを嫌悪させたのは、インド人のもつ美への欠落、混沌さ、不規則と不調和であったのかもしれない。勿論、気候の厳しさは言うに及ばない。インド(ヒンドゥスターン)の欠点について次のように述べている。

「ヒンドゥスターンは長所の少ないところである。人々の中に美しい者は見られない。楽しい交際もお互いの行き来もない。才も知力もない。礼儀作法もない。寛大さも恵み深さもない。芸術や手仕事においても、整然さも形も、縦横のシンメトリカルな線もない。名馬もない。すぐれた犬もない。ぶどうもメロンも、うまい果実もない。氷もない。冷たい水もない。バーザールにも、よい料理もよいパンもない。公共浴場もない。マドラサもない。」「大河や谷や溪谷の中を流れている水の澄んだ川を除いて、庭園や建物には人工的な水路がない。また建物には、快適さや自然環境の良さ、秩序や調和がない。」⁽⁴⁸⁾

その一方で、インドの長所にも触れている。「大きな国である。金銀が豊富である。雨季の気候は非常に快適である。」「もう一つの長所は、あらゆる種類の職人が無数・無限にいるという点である」と述べている。⁽⁴⁹⁾ あまりにも欠点の部分だけが強調されたために、バーブルには自らインドの地を好まなかったという印象を定着させたという指摘もある。⁽⁵⁰⁾ むしろインドのもつ潜在的な豊かさに気づきはじめ、次第にこの地にティムールを再興する新たな帝国を打ち立てたいと思うようになったのではないか。

しかし、インド征服の道は険しく厳しいものであった。デリーを征服し、アグラに入城したものの、バーブルが支配していたのはデリーとアグラのわずか2都市のみで、周辺の諸勢力はまだ服属していなかった。厳しい暑さのために、アグラ征服後に多くの者が一度にばたばた倒れ死に始めた。こうした状況下で、バーブルの軍中にはカーブル帰還を望む声が充満していた。バーブルはベグ(beg, トルコ系の軍事指導者の称号)全員を招集して、次のように述べて、ベグたちの不安を取り除こうとした。

「統治や支配は手段・方策なしでは成功はおぼつかない。君主やアミールの仕事は家臣や領地なしでは不可能だ。私たちは何年も努力して苦労を重ね、遠い道のを一步一步進んで行軍し、私たち自身と兵士たちを戦いの危険にさらして来たのではなかったのか。神のご加護により、私たちはこのような多数の敵を破り、このような広大な国を征服できたのではなかったのか。いま、このように懸命になって征服した諸地方を何の理由もなく放棄するどんな必然性や必要性があるのであろうか。またカーブルにもどって貧困の苦しみを味わい続ける必要がはたしてあるのであろうか。以後、私の味方である者は誰であれあのような事を云ってはならぬ。我慢できずに去りたいと思う者は誰であれ行った所からもどって来るな。」⁽⁵¹⁾

こうしたバーブルの説得にもかかわらず、インドを嫌ってカーブルに帰る気持ちを変えぬ者もおり、バーブルの親友ホージャ・カラーンもカーブルへと去った。⁽⁵²⁾ むしろこのことで、バーブル

と目的を同じくするベグの強固な集団、いわゆるムガル朝が形成されていったともいえる。この頃から周辺諸地域のバーブルへの臣従が続き、領土は拡大していった。

インドにおけるバーブルの治世はわずか4年間であった。彼がインドに残した建造物は極めて少ない。アグラで亡くなり、仮埋葬されたとされるラーム・バーグ庭園がその代表とも言える。バーブルについて、フィリシュタは次のように記述している。

「彼は慈悲深い君主であった。あまりにも寛容で、ときとして呆れるほどであった。高位の人物には敬意を忘れず、恩知らずな者であれ反逆を企てた者であれ誰に対しても許すことは珍しくなかった。それはまるで善によって悪を制することを自らの信念としているかのようであった。その結果、彼に敵意を持っていた者さえ彼に接すると敵意を和らげ、彼の徳に対する賞賛者になった。詩や散文や音楽の腕前にかけては、彼にかなう者はいなかった。彼がトルコ語で著わした自伝は、その格調の高さと真に迫る描写をもって世界的な賞賛を浴びている。」⁽⁵³⁾

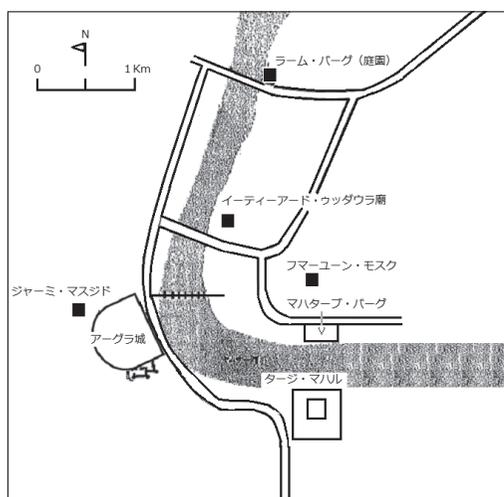


図26 アーグラの中心図



図27 ラーム・バーグ庭園
(アーグラ、ヤムナー川沿いにある)

(2) フマーユーン(在位1530-40年, 55-56年)

初代皇帝バーブルの死後、第2代皇帝に就いたのはバーブルの長子、フマーユーンであった。フマーユーンは幼少期からバーブルに溺愛されていた。バーブルがまだインドを征服する前のことであるが、長子フマーユーンはバダフシャーンの統治者として派遣された。当時、14・15歳(満12・13歳)の少年に過ぎなかったフマーユーンを心配し、バーブルは妃マーヒム・ペーガムを伴い赴任先まで付き添って行ったほどであった。⁽⁵⁴⁾ また、インド征服後、溺愛した息子フマーユーンが重い病にかかると、バーブルは「ムハンマド・フマーユーンよりも大事なものは、私の命のみだ。私は私自身を喜捨しよう。神がお受けとり下さらん事を」と神に誓いを立てたほどであった。⁽⁵⁵⁾ 奇跡的にフマーユーンは回復したが、肉体の衰えに心労が重なり、ついにバーブルはアグラで亡くなった。

1530年、フマーユーンは23歳で王位に就いた。その年に、フマーユーンの命により、アグラ

に「フマーユーン・モスク」(図28)が建てられた。⁽⁵⁶⁾ 彼はバーブルが残した多くの問題に取り組まねばならなかった。行政や財政ばかりでなく、王権もまだ確立していなかった。アフガン人たちはまだ征服されておらず、ムガル勢力を追放できるという希望を抱いていた。問題はそれだけではなかった。帝国を維持するという観点から、ティムールの領地相続に関する伝統的な慣習が障害となっていた。いずれにせよ、領地相続をめぐる弟カームラーンとの争いは、帝国分裂の要因ともなりかねなかったため、フマーユーンの宗主権を承認する代わりに、弟にラーホールとムルターンの領地を認めざるをえなかった。

フマーユーンが抱える問題はむしろ、東部におけるシェール・シャーのアフガン勢力の急速な拡大とグジャラート王バハードゥル・シャー(在位1526-37年)の勢力と征服範囲の拡大に対処しなければならないことであった。とくに1539～40の間、シェール・シャーと2度にわたって戦い、結局敗北し、デリーを放棄しペルシアの地に逃れるしかなかった。フマーユーンは即位の直後、デリーに新たな城砦の造営に着手していたが、結局その目的は実現されず、ムガル帝国も一時中絶することになった。しかし、スール朝の初代君主となったシェール・シャーは、宿敵フマーユーンが着手した新都造営事業を受け継ぎ完成させた。それが今日、「プラーナー・キラ」の名で知られる城砦である。広大な城砦の内庭には、八角形の「シェール・マンデル(Sher Mandel)」という小さな建物とアフガン風に建てられた「キライ・クーナ・マスジド(Qila-i-kuhna Masjid)」が離れて鎮座している。

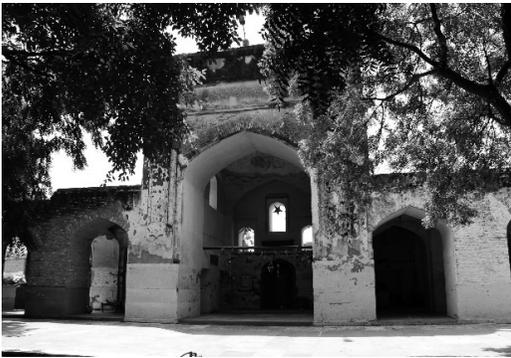


図28 フマーユーン・モスク



図29 プラーナー・キラの門



図30 シェール・マンデル



図31 キライイ・クーナ・マスジド

北インド(デリー、アーグラ)を追われたフマーユーンは放浪の末、イランのサファヴィー朝タフマースプ(在位1524-76年)のもとに身を寄せた。ある日、会話の中で、シャー・タフマースプはフマーユーンに「どうしてあなたの弱い敵があんなに強くなったのですか」と尋ねた。するとフマーユーンは「私の兄弟の反目のためです」と答えた。⁽⁵⁷⁾ 実は、その後も王位をめぐる兄弟の確執は続いた。しかし、スール朝の宮廷内部の抗争が起こると、その混乱に乗じて、サファヴィー朝の支援を受けて、北インドに進軍し、55年にデリーを占領した。再即位したフマーユーンは、シェール・シャーの造営した大城砦を占領し、その内部を改修し宮廷を設けた。しかし支配してまもなくして、フマーユーンは図書館(「シェール・マンデル」)(図30)の階段から滑り落ちてこの世を去った。その時の様子をフィリシュタは次のように記述している。

「1556年1月21日の夕方、図書館のテラスを歩いたのち、フマーユーンは新鮮な空気を吸おうと腰を下ろした。しばらくして、階段を降りようとしたとき、王の所属のムアッズィン(礼拝の呼びかけ人)が礼拝の時を告げた。いつものように、フマーユーンは立ったまま礼拝時の言葉をくり返し、ムアッズィンの呼びかけが終わるまで2段目に座っていた。礼拝に行こうと、握っていた杖で体を起こし、何とか立ち上がろうとしたとき、杖が滑って、フマーユーンは下に真っ逆さまに落ちた。」⁽⁵⁸⁾

フマーユーンは歴史的な建造物を残すことはできなかったが、ペルシア細密画の流れを汲むムガル絵画(細密画)をインドにもたらした。フマーユーンのために、広大な四分庭園(チャハル・バーク)の中央に建つ巨大な墓廟(「フマーユーン廟」)が建てられた。その建物は、完璧な左右対称性を備え、広大なその基壇の上には大きな大理石のドームを頂き、その周りにはチャトリと呼ばれるあずまや風の小さな建物が付いている。パーブルが、インドには「芸術や手仕事においても、整然さも形もなく、縦横のシンメトリカルな線もない」「大河や谷や溪谷の中を流れている水の澄んだ川を除いて、庭園や建物には人工的な水路がない。また建物には、快適さや自然環境の良さ、秩序や調和がない」と嘆いていたことを考えると、まさにフマーユーン廟はパーブルが思い描いていた美しい理想の建造物(庭園、墓廟など)の形であったかもしれない。⁽⁵⁹⁾ この墓廟が、以後のムガル朝の墓建築のプロトタイプとなり、タージ・マハルの祖型となったと言われる。

フマーユーン廟は誰が造営したのかについて諸説がある。フマーユーンのペルシア人妃ハージ・ベークムが造営したという説もあるが、着工が始まったのが1561/2年で、1572年に完成したと考えれば、アクバルが皇帝としてインド各地の平定と統治機構の確立に乗り出し、1560年代後半には新都アーグラ建設に精力を傾けていた時期と重なる。こうした歴史的事実からアクバル大帝によって建造されたものだという説もある。⁽⁶⁰⁾ ただ、信仰心の篤かった妃ハージ・ベークムがアクバルにフマーユーン廟の建設を懇願したとしても決して不思議なことではない。現在、フマーユーン廟の入り口の史跡案内板には、死を悼む未亡人、ハミード・バーヌー・ベークム(ハージ・ベークム)がこれを建造したと書いてある。

これまでのアフガンのスルターンが建てた建築物に比べると、フマーユーン廟に見られるようにはるかに洗練されたものになっている。こうした外見の美しさは、おそらく洗練された文化的素養なしには造りだせないと言える。フマーユーン廟の性格についてフィリシュタが記述したものにもそれは現れている。

「フマーユーンは当意即妙の才と同様に上品な振舞いにおいて際立った君主であった。彼は、自分の大部分の時間を社交と娯楽に費やす傾向があった。しかし、彼は天文学や地理学といった科学に専念し、自然力の性質について学術論文を書きただけではなく、役に立つ地球儀や天球儀を作らせたりした。」⁽⁶¹⁾

確かに、温厚で高潔な性格で、科学の知識を兼ね備えた優れた人物であったと言える。むしろフマーユーンの性格は、兄弟に対する余りにも深い温情によく表れている。フマーユーンとの確執の末、ついに弟カームラーンはフマーユーンに捕えられた。その顛末について、フィリシュタは次のように書き残している。

「ムガルの長官たちは皆、カームラーンがこれ以上政府の混乱を引き起こさないように死を与えるべきだという意見を持っていた。しかし自分の手で兄弟の血を汚すのに気が進まないフマーユーンは、彼を遠くにやることで満足した。しばらくして処罰が下された。フマーユーンは彼に会いに行った。弟カームラーンは直ぐに起き上がり、彼に会うために2・3歩前に進み出て、『王の栄光は不幸な者を訪れることで傷つくことはありません』と言った。それを聞いたフマーユーンは号泣した。結局、罰せられず、カームラーンはシンドを通してメッカに行くことが許された。そこで3年ほど暮らしたあと、1556年に亡くなった。」⁽⁶²⁾



図32 フマーユーン廟

3. スール朝

(1) シェール・シャー(在位 1535-45年)

シェール・シャー(Shēr shāh Sūr)の本来の名前はファリードであった。彼の出自は、ゴール朝の君主一族まで遡ることができる。ゴール朝の君主一族の息子の一人、ムハンマド・スールがロハ(地域名)のアフガン族長の娘と婚姻した。それゆえ、ムハンマド・スールの末裔は、スールアフガンと呼ばれた。その意味では、スール族はアフガンの中でも最も著名は一族に挙げられるかもしれない。

彼の父ハッサン・スールは、アフガン・スール族出身で、ペシャワールのロハ生まれであった。ローディー朝の創始者バフロール・ローディーが王位に就いた時、祖父のイブラヒーム・ハーンは

職を求めてデリーに出かけ、バフロール・ローディーの宮廷貴族の一人に雇われた。バフロールの息子スィカンドルが王位に就いたとき、有能な貴族であったジャマル・ハーンはジャウンブルの総督に任命された。このとき、ジャマル・ハーンはイブラヒム・ハーンとその息子ハッサンを召し抱えた。後にハッサン・スールは施与(ジャギール)としてササラームとタンダが与えられ、700頭の馬の管理が任かされた。ハッサン・ハーンには8人の息子がいた。そのうちのファリード・ハーン(のちのシェール・シャー)とニザーム・ハーンは同じ母から生まれ、残りは嫡出でない側室の息子たちであった。⁽⁶³⁾

父親のハッサンは妻や子供にはほとんど関心がなかったもので、ファリードは父の家を去り、ジャウンブルの総督、ジャマル・ハーンに普通の兵士として仕えた。さすがに父ハッサンも息子には教育が必要であると考えていたので、ジャマル・ハーンに「息子を帰るよう説得してください」とお願いする手紙を送った。ジャマル・ハーンは、「ジャウンブルにはササラームよりもよい教育の場所があります」という返事をした。ファリードは決して学ぶことを怠っていたわけではなかった。すでに有名な詩人サーディーの作品をすべて暗唱することもできたし、さらに他の分野にも熟達していた。⁽⁶⁴⁾

ファリードは多くの時間を歴史と詩の勉強に費やした。その研究熱心さから、彼はジャマル・ハーンの寛容な励ましの言葉を得た。数年後に、父ハッサンがジャウンブルにやってくるようになり、息子と和解すると、最後にはハッサンは自分の領地すべての管理をファリードに任せるようになった。ファリードは、その領地を管理するにあたっては、「管理の安定性はすべて公平によるもので、それは暴力ではなく大いなる配慮(保護)であるべきだ。弱い者を圧迫したり、強い者が法を破り刑罰を受けなかつたりしてはいけない」という格言を実行した。貧しい者には公平に扱い、権威に齒向かうようなザミンダール(地主)には服従するよう命令した。こうして、父親の領地はファリードにより、よく耕された肥沃な土地になり、収益も確実に出るようになった。⁽⁶⁵⁾

父親が亡くなると、シェール・ハーン(のちのシェール・シャー)と名を改めたファリードは父親の領地の分割をめぐる異母兄弟のスレイマンと争いになった。スレイマンは、ジャウンブルの地区で1500騎馬隊の長官を務めていた遠戚のムハンマド・ハーン・スールに協力と保護を求めた。シェール・ハーンとスレイマンとの領地相続の争いは、次第にシェール・ハーンと遠戚のムハンマド・ハーン・スールとの争いへと転化し、ついにシェール・ハーンはムハンマド・ハーン・スールに追われ、ムガル帝国バーブルの領土のクッラー(Kurra)とマヌルクプール(Manulkpoor)の総督、スルターン・ジュネード・ビルラス(Jooneid Birlas)の下に逃れ助けを求めた。

その後、領地相続の件が片付くと、シェール・ハーンは自分の土地の管理を兄弟ニザーム・ハーン任せて、クッラーの恩人のスルターン・ジュナイド・ビルラスの下を訪ねた。ちょうどその時、彼はアーグラに行こうとしていた。スルターン・ジュナイドはシェール・ハーンと一緒に行かないかと誘った。そこで、スルターン・ジュナイドは彼にバーブルを紹介し、バーブルのチャンデリー(Chundery)への遠征に随行することになった。その遠征での2つのエピソードをフィリシュタは次のように記述している。

「しばらくバーブルの野営に逗留していたシェール・ハーンは、ムガルの風習や宮廷の慣習を観察していた。あるとき、友人の一人に『インドから彼ら外国人を追いだすのは難しいことは何もないと思う』と言った。その友人がその理由を尋ねると、シェール・ハーンは、『王自身、有能な人物であるが、ほとんど仕事に専念していない。彼はすべてを家来に任せている。

彼らは皆、地位を悪用している。王の関心よりも自分の関心に目が向いている。それゆえ、アフガン人同士で争わずもし団結するようなことになれば、その企みは達成されるだろう。たまたま今彼(バーブル)に恩恵がもたらされ、彼自身も支配する資格があるとさえ思い込んでいる。それがいかに難しくても今に姿を現す』と答えた。その友人は大笑いして、その考えを一蹴した。」⁽⁶⁶⁾

数日後、シェール・ハーンはバーブルとその家来たちと夕食を共にした。その時のエピソードについて、フィリシュタは次のように記述している。

「シェール・ハーンは、王(バーブル)のテントで夕食の席についた。彼の席の前には固い皿が数枚置いてあった。しかも、そこにはスプーンしか置かれていなかった。彼はナイフを求めたが、召使いはそれを持ってこなかった。仕方なく、自分の短剣を抜いて肉を切った。その様子に周りの人は目をそらしたが、それには目もくれず、ガツガツと肉を食べた。彼の行いを一部始終見ていたバーブルは、召使いの給仕の方を向いて、『このアフガン人は些細なことで落ち着きを失ったのではない。彼はいずれ偉大な男になるであろう』と言った。」⁽⁶⁷⁾

その後、シェール・ハーンは、1530年頃までに全ビハールを支配下に置くようになった。そして1539年、フマーユーン軍との戦いの際に、シェール・ハーンは2度目のベンガル侵入を行い、その首都ガウルを占領し、独立政権を樹立した。シェール・ハーンは、シェール・シャーの称号を得て、スール朝のスルターンとなった。その際に、シェール・シャーは、貨幣を鑄造し、金曜礼拝で自分の名を唱えさせた。翌年には、カナウジでフマーユーンに決定的な勝利を収め、アグラ、デリーを奪って、北インドに覇権を確立した。その後、覇権拡大のために、パンジャーブやマールワールなど北部・中部各地に遠征した。しかし、1545年5月22日、カリンジヤールの城塞の外で、近くの手投げ弾が爆発し、その傷がもとで亡くなったと言われる。彼の治世はわずか10年余りであった。シェール・シャーは、臣民に対する良識や才能などは公平正義に比べて大したことではないと考えていた。彼はインドの地に輝かしい多くの業績を残した。

「ベンガルとソナルガオンから2000マイルあるインダス川まで、彼はキャラバンサライ(隊商宿)を建て、1.5マイル離れた場所ごとに井戸を掘った。さらに彼は幹線道路沿いに神アッラーを礼拝するための壮麗なモスクをたくさん建てた、そこにはコーランの読み手やムッラー(イスラーム知識人)を任命した。あらゆるステージで国や宗教を問わず、見知らぬすべての人々が彼らの教養に応じて公の費用で、楽しめるように命令した。そして彼は、強烈な太陽光線から旅人を守るために、また渇いた喉を癒すために道路沿いに果樹を植えた。政権に迅速に情報を送るために、また貿易や通信の利便性のために適切な距離に站(駅)が設けられた。同じ施設がまたアグラからマンドゥーまで、450マイルの距離に整備された。果樹も道路沿いに植えられモスク、キャラバンサライ、井戸などもお互いに短いに距離に建てられた。彼の支配の間、住民の安全があまりにもよかったので、盗まれる心配なく、旅人も商人も道路沿いに所有物を置いたり、ぐっすり眠ったりできた。」⁽⁶⁸⁾

シェール・シャーは、自分の顎鬚が白くなったと言われて、「なるほど私は人生の晩年で王位を

手に入れたが、しかし私は、短い間に私はこの国の役に立ったのであろうか、自分の臣民の幸福に寄与したであろうかというように、いつも後悔の連続でした」と答えたと言われる。⁽⁶⁹⁾ もしシェール・シャーが不慮の事故で亡くならず、インドを支配し続けていたら、どんな世界を築き上げたであろうか。我々は、ただ現在残されているシェール・シャーの建造物を見て想像を巡らす以外に道はない。



図33 シェール・シャー廟



図34 ハッサン・ハーン廟

おわりに

サイイド朝のスルターン、ヒズル・ハーンとムバーラク・シャーはつねにティムールを意識しながら支配を行い、ムハンマド・ヒシャーとアラーウッディーンはアフガン系諸部族の首長や宰相に支持を得ながら支配を行わざるをえなかった。いわばサイイド朝は弱小で短命な政権であった。それは明らかに建造物にも現れている。ヒズル・ハーンは、サイイド朝はあくまでもティムールの傀儡政権であり、自らも代理人に過ぎないことを自覚し、その姿勢を貫き通した。それゆえに、ヒズル・ハーンの墓廟はデリーにはない。おそらくティムールに遠慮して、スルターンとしての墓を作るのを憚ったのであろう。

ムバーラクの治世においても、サイイド朝はティムールの影響下にあり、その一方でパンジャーブのヒンドゥー諸種族の威嚇を受けなど、その対応に追われていた。しかし、ムバーラクは新都建設に意欲を燃やすなど、スルターンとしての独立を志向していたと言える。今日もなお、「ムバーラク・シャー・コートラ」に、スルターン・ムバーラク・シャー・サイイドの墓とされる八角形の墓建築(図8)が残存している。その場所にムバーラクは新都「ムバーラカーバード」を造営したのではないかという説もあるが、まだ明らかにはされていない。

ムハンマド・シャーとアラーウッディーンの治世は、内憂外患というよりは宮廷内部の宰相を中心とした権力争いに終始していた。スルターン・ムハンマドは気が弱く、優柔不断であったがゆえに、強い者や宰相の意見に耳を傾け、愚かな判断を繰り返して行った。宮廷貴族の支持を失い、求心力は急速に衰えていった。現在もなお、ムハンマドの墓とされる八角形の墓建築(図9)はローディー公園内にある。ムハンマドの気の弱い性格や彼が置かれた厳しい支配状況を考えると、なぜムハンマドの墓の方がムバーラクの墓(図8)よりも大きさと均衡さにおいて勝っているのか。その理由は分からないが、いずれの墓様式も、八角形の墓室の周囲に周廊を持つ様式はテランガーニー

やムバーラクの墓にも共通するもので、恐らくスルターンというよりも宰相クラスの建築様式を継承したものと言える。アラーウッディーンは、ムハンマドよりもさらに気が弱く軟弱者で、反逆者の口車に乗せられ、愚かにも味方の宰相を投獄し失脚させるなど、最悪の支配を繰り返していた。最後には自ら退位し、気に入った新都バダーユーンに移り、そこで生涯を終えた。アラーウッディーンの墓廟については不明である。

ローディー朝のパフロールは、部下のアフガンに対しては、同族の中の指導者の一人に過ぎないという姿勢を一貫して崩さなかった。その一方で、イスラームへの信仰が厚く、質素な生活を旨とし、アフガンであることを誇りとしていた。デリーには、パフロール・ローディーのものとする墓が2つある。1つは、屋上には5つのドームを頂き、開放的な四角い質素な墓建築(グンバド)(図16・17)がチラグ・デリーにある。パフロールがなぜこの地に墓を建てたかは不明であるが、近接してシェイフ・ナスィールッディーンという有名なスーフィー聖者の聖廟(ダルガー)があることを考えると、彼個人の性格の強い墓といえる。もう1つは、ローディー公園内にある「シーシュ・グンバド」(図18・19)であるが、これはローディー一族の栄華を誇る墓建築といつてよい。

パフロールの後を継いだシカンダルは、ローディー朝の威信をさらに高める方向へと舵を切った。その方向はまさに中央集権化とイスラーム化であった。イスラーム化により、偶像は破壊され、ヒンドゥー寺院はモスクに替えられた。現実には、彼の威信がどれほどのものであったかは分からないが、シカンダルが造ったと思われる建築物がローディー公園内に残っている。シカンダルの墓建築(図21)と「バラ・グンバド・モスク」(図23)を見る限り、明らかにパフロールよりは規模も壮麗さによってローディー朝の威信を示している。

最後のイブラーヒーム・ローディーは、シカンダルよりもさらにスルターン権力の専制化を推し進めようとした。しかし、イブラーヒームの独裁的で残虐な性格が災いし、身内から裏切り者を出す結果となり、ついにはパーブルのインド侵入を許し、イブラーヒームの治世でローディー朝は消滅した。したがって、イブラーヒームの墓も建造物も存在していない。いずれにせよ、ローディー朝の墓建築は、八角形に囚われることなく、自由なアフガン諸族の自主独立の性格を色濃く残す墓建築が多い。

パーブルとフマーユーンの時代はムガル帝国の創成期にあたる。とりわけムガル朝の初代パーブルはわずか4年の治世で終わっているために、ムガル人の特徴的な建造物は残っていない。ただ1つだけ、彼が造った最初のムガル庭園がアーグラに残っている。それが「ラーム・バーク(本来の名はアーラーム・バーク)」(図27)という庭園である。幾何学的なイスラーム庭園が北インドに登場したのである。パーブルの後継者となったフマーユーンは、まだ行政・財政も整わず、内政も不安定の中、シェール・シャーとの戦いに負け、ムガル帝国は一時中断する事態となった。フマーユーンの治世は11年ほどに過ぎなかったが、その間にムガル人の建築文化の萌芽を垣間見ることができる。それはデリーにある「プラーナー・キラ」(図29)である。アフガン人と明らかに違うムガル人の建築様式がそこには見て取れる。しかし、この建築物は決してフマーユーンが造ったものとは言えない。なぜなら、フマーユーンが城砦を造り、それを奪ったスール朝のシェール・シャーがその内庭に「シェール・ガル」と呼ばれる建造物、「シェール・マンデル」(図30)と「キライ・クーナ・モスク」(図31)を建て、さらにそれを奪い返したフマーユーンが改修するという、いわばムガル人とアフガン人の合作ともいえる歴史的建造物となっているからである。

「プラーナー・キラ」を別にすれば、シェール・シャーが造った建造物はビハールにある「シェール・シャー廟」(図33)だけである。スール朝のシェール・シャーはビハール出身のアフガ

人であった。その生前に建てたのが、ベナレスにほど近いササラームにある「シェール・シャー廟」である。デリーに確立していた八角形の墓建築様式を踏襲しながらも独自のスタイルを生み出している。インドにおいて、シェール・シャーが果たした大きな貢献は建造物よりもむしろ行政・財政基盤を整え、道路などのインフラを整備したことにあつたといえる。第3代ムガル皇帝のアクバルがムガル帝国を築くことができたのは、シェール・シャーのお陰ともいえる。

デリー・スルターン朝末期のサイイド朝・ローディーの墓建築は、当時の支配者の権力のあり方を知る上で貴重な手掛かりを残している。同時に、その建築様式もサイイド朝からローディー朝へと形を変えながらも継承され、独自の建築様式を生み出している。しかし、こうした八角形を中心とする墓建築もスール朝のシェール・シャーの墓廟を最後に北インドから姿を消すことになる。ムガル帝国の出現は、北インドに全く新しい建築様式をもたらした。それはまさに、整然さと縦横のシンメトリカルな線を中心とした庭園であり墓建築であった。その最初のもので、アーグラのラーム・バグ庭園であり、さらにデリーのフマーユーン廟へと継承された。これはムガル朝の墓建築のプロトタイプとなり、タージ・マハルの祖型となったと言われる。

イスラーム文化とヒンドゥー文化の混淆がいつ頃から始まるかは明確ではないが、ローディー朝のスイカンドルの時代には、両者の融合ないし折衷傾向はかなり進んでいたのではないかと思われる。スイカンドルの学問の奨励により、ペルシア語を学ぼうとしなかったヒンドゥーでさえ、この治世においてイスラーム文学を学び始めたと言われる。スール朝のシェール・シャーによって行政・財政基盤と道路などのインフラが整備されるなど、文化的融合が進み、それは建築様式を含め、ムガル朝のアクバル帝によって一つの果実がもたらされたと言えるのではないかと思う。

注

- (1) R.Nath, *History of Sultanate Architecture*, Abhinav Publications, NewDelhi, 1978, pp.84-85. 現在でも、この墓廟はチシュティー教団のニザームッディーンの聖廟の近傍にある。しかし、その周りには人家が密集し、その墓廟の中にはムスリム家族が住んでおり、全容を見ることができない。この墓廟以外にも、テランガーニーはデリー周辺に、カーラーン・マスジド(Kalan Masjid)やキルキーマスジド(Khilki Masjid)など7つの集会モスクを建立したと言われる。
- (2) R.Nath, *ibid.*,p.84. Sheila S.Blair and Jonathan M.Bloom, *The Art and Architecture of Islam 1250-1800*, Yale University Press.pp.151-154. デリー・スルターン朝の始まりから前後して、南アジアには様々なスーフィー教団が組織的に活動を開始している。初期にはチシュティー教団、スフラワルディー教団が、後期からはカーディーラー教団、ナクシュバンディー教団が発展を遂げた。
- (3) R.Nath, *ibid.*,p.84.
- (4) Mahomed Kasim Ferishta, *History of the Mahomedan Power in India Till the Year AD 1612*, Translated by John Briggs, Cambridge University Press,1829,Vol.1, pp.490-91.
- (5) 荒松雄、『中世インドの権力と宗教』、岩波書店、1989年、76頁。
- (6) Mahomed Kasim Ferishta,*ibid.*,pp.493-94.
- (7) *Ibid.*,p.494.
- (8) *Ibid.*,pp.506-07.
- (9) *Ibid.*,p.508.
- (10) *Ibid.*,p.512.
- (11) *Ibid.*,p.531.

- (12) *Ibid.*, p.530.
- (13) Sir H.M.Elliot & John Dowson, *The History of India, As told by its own Historians*, Low Price Publications, Delhi, 2014, vol.4, p.79.
- (14) 荒松雄、前掲書、78頁。
- (15) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.* vol.1, p.532.
- (16) *Ibid.*, pp.533-34.
- (17) *Ibid.*, pp.534-35.
- (18) *Ibid.*, p.536.
- (19) *Ibid.*, pp.536-37.
- (20) *Ibid.*, pp.538-39.
- (21) *Ibid.*, pp.540-41.
- (22) *Ibid.*, pp.541-42.
- (23) *Ibid.*, pp.542-43.
- (24) *Ibid.*, pp.544-45.
- (25) *Ibid.*, pp.547-48.
- (26) *Ibid.*, pp.550-52.
- (27) サティーシュ・チャンドラ、(小名康之・長島弘共訳)『中世インドの歴史』山川出版社、1999年、179頁。
- (28) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, p.562
- (29) *Ibid.*, pp.563-64.
- (30) *Ibid.*, p.587.
- (31) *Ibid.*, p.567.
- (32) 荒松雄、前掲書、280-281頁。
- (33) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, pp.575-76.
- (34) *Ibid.*, pp.576-77.
- (35) *Ibid.*, p.586.
- (36) *Ibid.*, pp.585-86.
- (37) *Ibid.*, p.579.
- (38) *Ibid.*, p.590.
- (39) *Ibid.*, pp.591-92.
- (40) *Ibid.*, pp.593-95.
- (41) Sir H.M.Elliot & John Dowson, *ibid.*, Vols.5, pp.22-23.
- (42) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, pp.598-99.
- (43) *Ibid.*, vol.2., p.2.
- (44) P.N. チョプラ、(三浦愛明訳)『インド史』法蔵館、1994年、103-104頁参照。
- (45) 荒松雄、前掲書、1-2頁参照。
- (46) 間野英二、『バーブル・ナーマの研究Ⅲ 訳注』松香堂、1998年、xxv、226-228頁参照。
- (47) 前掲書、xxxi参照。
- (48) 前掲書、466-467頁。
- (49) 前掲書、467頁参照。

- (50) 山田篤美『ムガル美術の旅』朝日新聞社、1997年、19-20頁。
- (51) 間野英二、前掲書、471-472頁。
- (52) 前掲書、472頁。
- (53) Mahomed kasim Ferishta, *ibid.*, vol.2, P.65.
- (54) 間野英二、前掲書、30頁。
- (55) 前掲書、621頁。
- (56) 「フマーユーン・モスク」の入口にある案内板には、「バーブルの友人で詩人で重要な貴族であったシェイク・ゼーン・カワフィがその建築資金を拠出した。この地域に庭園を造ったり、自分たちの住まいを建てたりしてきたムガ人の宗教的要求を満たすためにそれは建てられた。また彼らが造った庭園は、近くの人たちから『カーブル』と呼ばれていた」と記されている。
- (57) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, vol.2, p.155.
- (58) *Ibid.*, vol.2, pp.177-78.
- (59) 間野英二、前掲書、466-467頁。
- (60) フィリュシュタはアクバルが建造したと記述している。(Mahomed kasim Ferishta, *Ibid.*, vol.2, p.178.)
- (61) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, vol.2, pp.70-71.
- (62) *Ibid.*, p.170.
- (63) *Ibid.*, pp.98-99.
- (64) *Ibid.*, pp.99-100.
- (65) *Ibid.*, pp.101-02.
- (66) *Ibid.*, pp.106-07.
- (67) *Ibid.*, p.107.
- (68) *Ibid.*, p.124-25.
- (69) *Ibid.*, p.125.